

職人往来

市井の伝承者たち

文・写真＝吉田敬子

第12回 侘びの心の継承

建具職人

高橋孝一さん(高橋建具製作所代表
新潟県新発田市)



簾戸をつくる上で重要な、すだれ貼りをする高橋さん

「葎障子 細身の風の 来たりけり」
(草間時彦)

初夏を迎えると、襖や障子を簾戸(すだ)に取り替える。室内はほのかに暗く、簾を透かして見える外の風景と涼やかな風に安らぎを感じる。「季節を迎える、季節を楽しむ。これが、まさに簾戸の醍醐味です」と伝統的な簾戸にこだわる建具職人、高橋孝一さんの工場を尋ねた。

新潟県新発田市に高橋建具製作所はある。材木の買い付け、加工、製作、納品まで、すべて新発田の工場で行う。

当社には三つの自慢がある、と高橋さんは言った。ひとつは事務所も同じ敷地内にあるので、細かいデザインなど、すぐ職人に伝えられ、間違いがなく納得のいく建具づくりができる。もうひとつは、新潟県では良質な杉がとれること。三つめは、

すだれ屋さん。「当社の片腕的存在の職人です。簾戸に使うすだれは、萩・葎・ゴギョウ・竹ヒゴ・天津ヨシ・近江ヨシがあり、国産と中頭産(中頭)を使っていますが、国産の萩・葎は今、危機的状况にある」と言う。生産者の高齢化、作業の重労働、成育する水場の環境汚染、安い外国産が入ってくることなど、たくさん問題が山積みなのだ。

萩を簾用に出荷する工程は、①育成する②刈り取る③乾燥する④選別する⑤1本1本を穴に通し、焼きなめす⑥最後に束ねて、しばらく寝かせる。何千本という本数には気が遠くなる。

すだれ屋さんも同じだ。束で仕入れたものを1本1本確認し、太さを揃え、茎の柔らかいもの、虫食い・黒く変色したものは使用せず、枯れたものは鮫の皮でみがく、という徹底ぶりだ。「この手間と地道な作業の積み重ねからできたものの良さが、

後世に残せなくなる。真剣に考え、行動しなければいけない」と高橋さんは呼びかけている。

高橋さんのこだわりは、いつ頃はじめたのか。

新潟県新発田市は、かつて10万石の城下町だった。城下町独特の狭く曲がりくねった道を歩くと、旧家の庭に面した座敷には簾戸がはまっている。「昔から簾戸といえば萩で、すっきりしていて気持ちのいい建具です。建具は、生活といっしょに動いている感じがいいです」。

そんな環境の中で育った高橋さんは、子供の頃、よく行く銭湯で、大工の棟梁と知りあい、棟梁からいろいろな作り方を教えてもらったそうだ。話が聞きたくて棟梁を待ち伏せし、銭湯に来る時間に合わせて入り、話を聞いていたという。

「弟子の頃から簾戸が好きでした。簾戸は、木枠に簾をいれただけの単純な作りで、決まった型はなく、シ



材木の買い付け 新潟県産の杉丸太を見ているときが一番ワクワクするという。



木取り 木材の持つ美しさ・力を最大限に引き出すように木取る。

ンプルだからこそ、作り手の腕がはっきりでる建具です。一つ一つの工程を丁寧に行い、隅々がきちっと納まった簾戸に仕上げる。普通のことです」。

「建具の良いところは、何十年たっても治せるところです。手を使う道具を使えば、切っても傷は治る。機械は正確だが、加減というものがない。機械を否定はできないが、木のことは、わからない」。「飾っておく建具ではなく、使ってもらうために作る。建具によって落ち着く、普通が一番です。若い人たちが安心して商売できるように、今の自分の作り方を伝えていきたい」。

建具を住宅でたくさん使用するようになれば、大工さんも安定して育ってくると思う、と話してくれた高橋さんには、あの銭湯で待ち伏せし、いろいろな作り方を教えてもらった大工棟梁の職人の技と侘びの心の継承を感じた。

「普通です。普通の建具屋ですから、いつでも来てください」と丁寧に見送ってもらった私は、忘れかけていた礼儀、作法、普通のことを見せつけられた思いだった。 ■



削り 万能機を使って直角を出し、厚さをそろえる。



組み立て それぞれの部材を組み立てる。この後、すだれ貼りをする。



墨つけ 毛引きという先のとがったもので印をつける。



建具をつくる道具たち



すだれの種類(左から萩、焼きヒゴ、天津ヒゴ、近江ヒゴ)



簾戸に替えた室内